

「大人になれなかった弟たちに……」

七組 読んだ読んだ 第一場面



・「僕」は、かわいくてかわいくて仕方がない。「弟」の唯一の食べ物のミルクを、我慢しなければいけないのに、飲んでしまった。
大久保咲良

・「僕」はかわいくてかわいくて仕方がない弟の甘い甘いミルクを、飲んではいけないと分かっていたのに、我慢の限界で、飲んでしまった。
内木希美

・「僕」はかわいくてかわいくて仕方がない弟の大切なミルクを、悪いと分かっているのに、かくれて、それも何回も飲んでしまった。
満仲安紀

・「僕」は我慢の限界で、弟の大切なミルクを、兄として我慢しなければいけなかつたのに、飲んでしまった。
岩田美咲

・「僕」はかわいいかわいい弟の大切なミルクを盗み飲みしてしまいました。でも、そんな「僕」とは逆に、母は一家を支え、そして子どもたちを一番に思い、自分は食事也十分にしていません。私が今、その時代に生まれていたら、「母」になりたいです。でも、まだ私は「僕」と同じだと思えます。私たちから考えれば弟のミルクを飲んでしまった「僕」は最低だけど、もし自分が……と思うと、我慢できないかもということを思いました。
下り藤文乃

・腹が減つてもう限界の「僕」は、かわいい弟の大切なミルクを、飲んではいけないと分かつているのに飲んでしまつた。
母も、あんなに強く子どもたちを守れるのは、愛だと思うので、僕も、父になつたら、そんな風に子どもを守りたいです。
谷萩 駿

国民学校

一九四一年（昭和十六年）の国民学校令（昭和十六年勅令第一四八号）に基づいて設立され、六年の初等科と二年の高等科からなり、初等科はそれまでの尋常小学校などを母体とし、高等科はそれまでの高等小学校などを母体としていた。国民学校令の施行とともに、それまでの尋常小学校・高等小学校・尋常高等小学校はすべて国民学校とされた。

国民学校は、同盟国であるナチス党政権以降のドイツの初等教育に起源をもつと言われ、「子供が鍛錬をする場」と位置づけられ、国に対する奉仕の心を持った「少国民」の育成がめざされていたともいわれている。